# 第二講　「論証」を読む

## Ⅰ　「A↓x」の発見

論証が必要な命題（文）には「A↓x」という飛躍した部分があります。まずは、どこに飛躍があるかを見つけましょう。

**①　主語（主部）↓述語（述部）に飛躍がある場合。**

**②　修飾部（接続部）↓被修飾部（文）に飛躍がある場合。**

※文構造（係り受け）を分析する中で、構造的につながっているが、意味的につながっていない部分を探します。

※「x」は、「なぜ『〜』か」というように設問が指定している場合もあります。

## Ⅱ　論証部の発見

飛躍を埋める部分が論証部となります。「A↓x」のAの説明を求めましょう。

# Ⅲ「論証」のフレームワーク

## ①「単純な論証」Ａ→Ｂ

**根拠Ａから主張Ｂが導かれている。**

例文　Ａ子ちゃんは美人だ。　**根拠　Ａ**

したがって、　**導出　←**

私はＡ子ちゃんが好きである。　**主張　Ｂ**

※実はこの導出に必要な前提として、「私は美人が好きだ。」というものがあります。
これは「隠れた前提」として筆者の論証が成り立つように補ってやる必要があります。
筆者の論証が成り立つように隠れた前提を補うというルールを「**寛大の原則**」といいます。

②**「論証の連鎖」　A ↓ B ↓ C**

**主張Aが根拠Aとなって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠Bとなって主張Cが導かれる。**

例文　A子ちゃんは目鼻立ちがはっきりしている。　**主張　A　＝　根拠　A**

したがって、　**導出　←**

A子ちゃんは美人だ。　**主張　B　＝　根拠　B**

したがって、　**導出　←**

私はA子ちゃんが好きである。　**主張　C**

※この形が「論証」の中では一番多いです。「論証」の最後に来る文が「主張提示文」になります。
その前の文は「根拠」となります。

### ③「結合論証」

B ＋ A
―――――
↓
C

**主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。**

例文

| | |
|---|---|
| A子ちゃんは美人だ。 | **主張A** |
| ＋　結合 | |
| 私は美人が好きだ。 | **主張B** |

＝　**根拠**

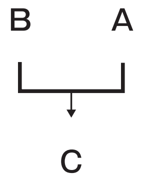
したがって、　**導出**　←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※31ページに説明した「隠れた前提」がある場合、この「結合論証」となります。
この形も「理由説明問題」ではよく出題されます。

※「Aのみ」「Bのみ」の解答は減点されます。

### ④「合流論証」




**根拠Aだけでなく根拠Bもあり、主張Cが導かれる。**

例文　A子ちゃんは美人だ。　**根拠　A**

また、

A子ちゃんは性格もよい。　**根拠　B**

したがって、　**導出**　←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張　C**

※この場合はどちらか片方だけでも「根拠」になります。
設問の場合には「理由を二つ説明せよ」となることが多いです。

## 傍線部理由説明問題

傍線部の問題の２大パターンが前回の「傍線部説明問題」と今回の「傍線部理由説明問題」です。ではまずその形式から確認しましょう。その設問形式は次の通り、

> **傍線部～とあるが、なぜか　説明せよ。**
> **or**
> **その理由を**

というものです。この問題に対してもやはり一定のアプローチの仕方があるので、今回はその設問解法を学びましょう。

# 傍線部理由説明問題解法

——「なぜか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・A → ×
（飛躍している部分）

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。
・Aの説明
・「論証」のフレームワーク

（次ページより問題演習）

つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

一般的に家族は、「ありのままの自分」を受け入れ、認めてくれるような安らぎの場所が理想とされている。ただ存在するだけで無条件によろこばれ、本音を出し合える関係性。そこでは「偽りの自分」を作る必要性はまったくない。それが大多数の人間に共有された理想的な家族のイメージであろう。

しかし現在、多くの人が家族に対して本音を隠し、「ありのままの自分」を過度に抑制し、家族の求める役割を演じ続けている。そうしなければ、家族というシステムを維持することができず、相互に承認しあっている微妙な関係が壊れ、自らの居場所を失ってしまうからだ。しかもこうした不安から家族の承認が維持されている限り、そこには特に「認められている」というよろこびは生じない。

実のところ、このような偽りに満ちたコミュニケーションは、現代社会では家族以外の人間関係においても頻繁におこなわれている。

たとえば、仲間の承認を得るために自分の本音（ありのままの自分）を抑え、仲間の言動に同調した態度をとり続ける若者は少なくない。仲間の間で成立するコミュニケーションにおいて、リーダー格の人間の気分次第

で変化する暗黙のルールを敏感に察知し、場の空気を読み取りつつ、絶えず仲間が自分に求めている言動を外さないように気を遣っている。

このようなコミュニケーションは「仲間であることを確認（承認）しあうゲーム」とも言い得るが、しかしその証は明確な役割や目的によるものではなく、空虚なものでしかない。価値のある行為によって認められるわけでも、愛情や共感によって認め合うわけでもない。それは場の空気に左右される中身のない承認であり、以下、このような承認をめぐるコミュニケーションのことを、「空虚な承認ゲーム」と呼ぶことにしよう。

家族や仲間関係において、相手の愛や信頼に疑いを抱くとき、自分は受け入れられているのかどうか、認められているのかどうか、強い不安に襲われるようになる。そのため、自分の考えや感情を過度に抑制し、本当の自分を偽って家族や仲間に同調し、無理やりに承認を維持しようとする。それはただちに「空虚な承認ゲーム」となり、必ず自己不全感がつきまとう。そして少しでもコミュニケーションに齟齬（そご）が生じ、その関係が行き詰まれば、自己否定的感情に襲われ、絶望的な気持ちになるのである。

[1]「空虚な承認ゲーム」が最も目立ったかたちで見られるのは、思春期における学校の仲間関係であろう。かつてこの関係は、親に認められなくとも、「ありのままの自分」を受け入れてくれる安息の場所であった。価

値観を共有できる仲間たちと相互に承認しあうこと、それは親の承認という呪縛から逃れる上で、とても大きな意味を持っていた。しかし、いまや思春期における多くの仲間関係は、本音をさらけ出せる場所ではなく、「ありのままの自分」を抑制せざるを得ない閉塞感が漂っている。

そもそも思春期の生活のほとんどは家庭と学校の往復であり、交友関係も同級生やサークルの仲間に限られている。このような小さな人間関係のなかで、彼らは生活の大半を過ごす場所を守るために、仲間と接している間は絶えず場の空気を読み、仲間の気に障りそうな言動は極力避けている。相手の反応を少しでも読み間違えれば、仲間との関係は容易に破綻し、仲間はずれになり、「友だち」という立場を失ってしまうからだ。そのため、仲間との間に感じ方や考え方のズレが生じても、本音を表には出せなくなっている。

少数の仲間とうまくいかなくなっても、他の友だちを見つければよい、別の仲間に入ればよい、そう思うかもしれない。しかし、社会学者の土井隆義によれば、現在の学校におけるクラス内での仲間集団には一定の階層（身分制度）があり、誰もが自分の属するグループの仲間以外は、友だちの対象とは見ていない。これは一般に「スクール・カースト」と呼ばれている。

この問題について、臨床心理士の岩宮恵子は次のような興味深い事例を報告している。

カウンセリングを受けに来たある中学二年の女子Hは、クラスのなかで一番上のグループとされる、おしゃれで洋服や髪型に気を遣う派手なグループに属していたが、仲間はずれにされたことをきっかけに、教室に入りにくくなり、保健室で過ごすようになった。他のグループにはHを受け入れようとする生徒たちもいるのだが、彼女たちは位の低い地味なグループであるため、Hは絶対にいやだと言う。[2]その子たちが話しかけてきても、「話しかけんな！」と拒絶してしまうほどだ。一方、自分を排除した仲間たちに対しては、ご機嫌をうかがうような、卑屈な態度を続けており、無視されたり、冷たくあしらわれても、元のグループに戻りたいと切望している。

岩宮恵子によれば、これはHに限らず、多くの思春期の女の子に共通する傾向であり、「彼女たちは、自分が属しているグループの数人の人たちには、信じられないくらいの労力を使って関係を維持することに［　A　］としているのに、自分が重要と思わない人に対しては、ほんとうに無神経な言葉で傷つけることがある」（『フツーの子の思春期』）。

おそらくHの苦悩の根幹には、自己の存在価値が下落することへの恐怖

がある。孤独だけが問題なら、別のグループの人間に優しくされれば、その苦しみはかなり癒されるはずだが、彼女にはまったくその様子が見られない。むしろ、身分が低いグループと付き合えば自分の存在価値が落ちる、それだけは避けたい、という激しい抵抗感がある。そのためどんなに苦しくても、自分の属する仲間との間で「空虚な承認ゲーム」を繰り返してしまうのだ。【　a　】

中学生ぐらいの年齢ではまだ交友関係も狭いため、家族や友人関係など、身近な人々の承認に固執してしまうのも無理はないし、それは昔もいまもさほど変わらないだろう。しかし、スクール・カーストのような現象には、身近な人々のなかにさえ線引きをし、あえて交友関係を広げまいとする心理が垣間見える。線引きをした外側の人間は、たとえ同じクラスにいても「見知らぬ他者」と同じであり、自分を認めてほしい相手ではないのである。

【　b　】

ここ数年、進学や就職の際に都会へ出て、新しい世界や人間に出会いたい、というような、かつて多く見られた若者が減少しつつあるのも、こうした心理を反映している。マーケティング・アナリストの三浦展（あつし）によれば、生まれ育った地域（地元）を離れず、地元で進学や就職をし、大人になっても小学校や中学校の頃からの仲間と付き合い続ける、そういう地元志向

の若者が増えているという（『ニッポン若者論』）。なにしろ都会に行かなくとも、華やかな消費生活を享受できるし、携帯によって、古くからの仲間ともつながり続けることができるのだ。【　c　】

だがこれは、身近な人間関係だけを重視し、見知らぬ人々との出会いにはあまり期待もしていない、ということでもある。社会学者の宮台真司が、「仲間以外はみな風景」（『まぼろしの郊外』）と表現しているように、仲間以外の人間には関心がなく、見知らぬ人間はいてもいなくてもどうでもいい、と感じているのである。【　d　】

家族や仲間の承認のみを求め、それ以外の人々の承認を求めないのは、多くの人間の賞賛を求める野心とは無縁な、ある意味で堅実な生き方のように思えるかもしれない。理解してくれる人が少しでもいればそれでいい、という思いも十分に理解できる。しかし、見知らぬ大勢の人々の承認など不要だとしても、自らの行為に価値があるのかないのか、正しいのか間違っているのかについて、身近な人間から承認されるか否かのみで判断し、それ以外の人々の判断を考慮しないとしたら、それはとても危険な考え方である。【　e　】

たとえば、自分の会社の内部で不祥事が起き、大勢の人々に知らせなければ危険がある場合でも、社内で上司や同僚からの承認を維持するために、

会社の隠蔽工作に荷担してしまうかもしれない。あるいは、あまり素行のよくないグループに関わり、仲間の承認を得るために万引きをしてしまう人もいる。この場合、もし見知らぬ大勢の人々の考えや承認を考慮するなら、そのような行為に及ぶことはできないはずだ。

このように、見知らぬ他者の承認を無視することは、たとえ身近な他者の承認だけで十分だという謙虚な気持ちに発するとしても、結果的に見知らぬ他者を排除することになりかねない。

また、積極的にこうした排除に荷担することで、自分の存在価値をより一層高めようとする場合もある。仲間と一緒に他の人々の欠点をあげつらい、蔑視することで、自分たちだけは特別だ、というような一段高い位置に身を置くことができるからだ。先に例を挙げた女子中学生Hの地味なグループへの蔑視も、こうした心理から生じている。それは、自分とは無関係に思える人々を蔑（さげす）むことで、自らの存在価値の底上げを図ろうとする行為にほかならない。

求められているのは「自分は価値のある人間だ」という証であり、その確証を得て安心したいがために、身近な人々の承認を絶えず気にかけ、身近でない人々の価値を貶（おと）しめようとする。見知らぬ他者を排除することで、自らの存在価値を保持しようとする。たとえそれが悪いことだと薄々気づ

いていても、仲間から自分が排除されることへの不安があるため、それは容易にはやめられない。そして[3]底なしの「空虚な承認ゲーム」にはまってしまうのだ。

（山竹伸二『「認められたい」の正体』より。文章を一部改変した。）

問一　傍線部１「「空虚な承認ゲーム」が最も目立ったかたちで見られるのは、思春期における学校の仲間関係であろう」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号を答えよ。

ア　そもそも学校とは様々な感じ方や考え方を持った思春期の若者が集まる場であるため、たとえ同じグループの仲間であっても考え方にズレが生じるのは当然だから。

イ　学校という場では、先輩・後輩といった上下関係が非常に重視されるので、スクール・カーストのような上下関係も発生・定着しやすい前提が整っているから。

ウ　「ありのままの自分」を受け入れて欲しいと願う思春期の同世代が集まることで、同じ種類の不安や悩みを共有できる仲間が見つかりやすい環境が生まれるから。

エ　見知らぬ他人などどうでもいいと考える人も少なくない現代社会においては、思春期の若者にとって自己の存在価値を認めてくれるのは学校で知り合った仲間しかいないから。

オ　多くの時間を学校で過ごす思春期の若者は、社会との接点が少ない上、自己の存在価値を認め合う交友関係も必然的に学校の仲間に限定されてしまうから。

問二　傍線部２「その子たちが話しかけてきても、「話しかけんな！」と拒絶してしまう」とあるが、この女子生徒Ｈはなぜこうも強く拒絶するのか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号を答えよ。

ア　「偽りの自分」を演じることで、自らの存在価値が下落してしまうという恐怖心を覆い隠したいから。

イ　他者を蔑んだり、排除したりすることで、相対的に自己の存在価値を高く保ちたいという心理が働くから。

ウ　自分が仲間として認めない者は、どうでもいい存在でしかなく、無価値なものとしか思っていないから。

エ　スクール・カーストでは、下から上の階層へ話しかけること自体が暗黙のうちにタブー視されているから。

オ　たとえクラスメートでも、関心のない者はみな風景と同じであり、対等な友人とは見なさないから。

問三　空欄 A に当てはまる語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号を答えよ。

ア　悄然　イ　粛々　ウ　敢然　エ　汲々　オ　憮然

問四　傍線部３「底なしの「空虚な承認ゲーム」にはまってしまう」とあるが、なぜ底なしで空虚になるのか。その理由を、本文全体の内容を踏まえ、つぎの形式に従って、三十五字以上、四十五字以内で記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

［　　　　　　　　　　　］から。

問五　つぎの中から本文の内容に合致するものを二つ選び、解答欄の記号を答えよ。

ア　大勢の人々から承認されることを内心では望みつつも、それを最初から諦め、身近な仲間からの承認だけで妥協している現代の若者は、非常に危険な状態にあると言わざるを得ない。

イ　本当の自分を受け入れてくれる仲間の存在は、思春期の若者にとっては得難いものであるため、一旦その仲間を手に入れてしまうと、今度はそれを逃すまいと必死になり、「偽りの自分」を演じてしまうことすら厭わなくなる。

ウ　リーダーの意向や場の空気を読むことに絶えず神経を使い、「偽りの自分」を演じてまで承認を得たとしても、常に自己不全感がつきまとうため、積極的に交友関係を広げようとしない若者が近年目立ってきている。

エ　仲間からの承認を得ようと若者が躍起になる原因は、「自分は価値ある人間だ」という証が欲しいからであり、そのために自分を偽ることは厭わないが、自分を承認してくれる別の仲間を探そうという発想は見られない。

オ　「ありのままの自分」を受け入れてくれる友人や仲間が見つからないというのは、今日の学校という場にはありがちな問題であるが、現代社会では家族においてもそのような問題が発生している。

カ　自分を理解してくれる人が少しでもいればそれでいいという謙虚な姿勢をとりがちな現代の若者は、その謙虚さゆえ自己主張ができず、それが常にリーダーの言いなりになるスクール・カーストのような問題を生み出す原因にもなる。

問六　つぎの文章は、本文中のある段落に続くものである。どの段落の後に入れるのが最も適切か。本文中の【 a 】〜【 e 】より選び、解答欄の記号を答えよ。

これは思春期独自の問題というより、若い世代を中心に広く見られる傾向でもある。多くの人は思春期を終えて大学生や社会人になっても、身近な人々の直接的な承認にこだわる点では変わりなく、承認の対象を見知らぬ他者へ広げようという姿勢があまり見られない。

（次ページより解答欄）

問一

問二

問三

問四

から。

35

問五

問六

# 第二講「論証」を読む　解答

問一　オ

問二　イ

問三　エ

問四　場の空気に左右される中身のないものであり、仲間から自分が排除されることが不安でやめられないから。

問五　エ　オ

問六　b